

アイユーゴー 通信 第16号

申し込み・問い合わせ先：アイユーゴー 一途上国の人と共に 事務局

住所：590-0432 大阪府泉南郡熊取町小垣内1-10-18 TEL：072-452-8340 FAX:072-452-5680 ・090-9167-7053 (新田)

振込先：[アイユーゴー ダイヒョウリジ ニッタサチオ]

ゆうちょ銀行：00980-2-71223 / 三菱東京UFJ銀行阿倍野支店：6,921,467 / 三井住友銀行佐野支店：7,260,788

e-mail：snittaskmj0715@yahoo.co.jp homepage：<http://aiyugo.fc2web.com> (設立：2001/10/15)

発行 新田 幸夫 編集長 加藤 鐘三 発行者(株)フジカク

目次

- (1) 第4回保健・医療、福祉に関する4カ国合同セミナー
～神戸大学大学院保険学研究所教授
アイユーゴー副代表 三木 明德～
- (2) 2010年スタディツアーinベトナムを終えて
～アイユーゴー理事 北谷 成人～
- (3) スタディツアーに参加して
～昆布 孝子～
- (4) アイユーゴー法人化に向けて 経過報告
～アイユーゴー代表 新田 幸夫～



アイユーゴー主催 第4回 医療・保険、福祉に関する4カ国合同セミナー

神戸大学大学院保健学研究所教授
アイユーゴー 副代表 三木 明德

2010年10月22～24日の3日間、神戸学院大学と香川県三豊市詫間町の旧民家を会場にして、第4回保健・医療、福祉に関する合同セミナーが開催された。このセミナーには(財)三菱UFJ国際財団から助成を頂き、ダラット大学社会福祉学部(ベトナム)と神戸大学大学院保健学研究所が協賛大学、神戸学院大学と近畿大学が協力大学として参加した。



10月22日(金)午前10時に神戸学院大学に集合し、溝口史郎理事長を表敬訪問した。10時40分から始まったセミナー第一部：公衆衛生学セミナーでは、ワチラ氏(タイ・メーホンソン県副知事、難民キャンプ司令官)が医療リハビリテーション学科の学生約100名を前にして、「タイにおけるミャンマー難民の保護活動」と題して基調報告を行い(図1)、その後グループ討論が行われた。日本人にとって難民という言葉は遠い世界のものであるが、その現実を写真で見せられて、学生たちは大きな衝撃を受けたようである。

学生食堂で昼食をとり、午後1時20分からの第二部：社会福祉学セミナーでは社会リハビリテーション学科(社会福祉学)の学生約20名を対象に、ヒエン氏(ベトナム・ダラット大学社会福祉学部)が「ベトナムとフィリピンにおける社会福祉制度」と題して基調報告を行い、質問も含めて合同討議を行った。小休憩をはさんで、午後3時半からの第三部：海外交流セミナーには40名ほどの学生が集まり、3名がこれまでにやってきた海外活動、2名の神戸学院大学学生が日本の教育制度や医療・福祉制度

について報告した。海外活動に関心を持っている学生は多く、医療職者としての海外活動の話には「いつかは自分も…」という思いが喚起されたようである。また、神戸学院大学の学生は特訓を受けて英語で発表した(図2)。質問攻めに遭った学生は、「もっと英語を勉強しないとだめですね。」と反省の弁を洩らしつつも、自分の英語が通じたことに、少し自信を持ったようである。



図1 神戸学院大学の公衆衛生学セミナーで基調報告をするワチラ氏



図2 神戸学院大学の海外交流セミナーで発表する神戸学院大学の学生

午後6時半から40名ほどが参加して懇親会が開かれた。冒頭、挨拶に立った溝口理事長は、「アイユーゴーのこのような国際交流活動に大変期待している。」と述べられ、若い学生に対しては「国際交流は異文化を体験して、互いに尊重し合うことから始まりますが、そのためにはまず君達が日本のことをよく知らなければなりません。」と語りかけ(図3)、溝口理事長の乾杯の音頭で懇親会が始まった。この日のセミナーには神戸学院大学だけでなく、神戸大学、京都大学、大阪府立大学の学生など多数参加した。



図3 神戸学院大学の懇親会で挨拶する理事長の溝口史郎先生

10月23日(土)午前9時、四国ツアー隊は7台の車に分乗して神戸を出発した。これにも4名の海外組、神戸大学、近畿大学、京都大学の学生や教職員、アイユーゴーのスタッフ、三菱UFJ国際財団の福田一氏ら、合わせて27名が参加した。山陽自動車道と瀬戸大橋(瀬戸中央道)を經由して、予定より少し遅れて午後1時過ぎに会場に到着した。会場は明治20年頃に建てられた典型的な日本家屋である(図4)。



図4 四国会場になった香川県三豊市詫間町の旧民家

昼食で讃岐うどんを食べた後、午後2時過ぎから「日本の地方半農地区に見る様々な社会問題」というテーマで討論会が始まった。これには会場近くの住民も数人集まってくれた(図5)。急速に発展しつつある東南アジア諸国は、同じアジアの日本を手本にしている。戦後、日本は奇跡的な経済発展を遂げたが、その結果、少子高齢化、地方の過疎化、医療、介護、福祉、年金制度の破綻、環境破壊や若者の就職難など、様々な社会問題が生じている。戦後の発展を担い、その後の変遷を見てきた先輩達から生の声を聞くのが目的である。また、ミン氏(ベトナム・ホーチミン大学教員)がベトナムの現状を紹介した。

この間、一部の学生は「芋掘り」や交流会の準備をした。午後4時を過ぎても熱心な討論は終わりそうになかったが、美味そうなおいが立ち始めると、参加者が前庭に集まって交流会が始まった。ビールを片手にバーベキューをつつきながら、あちこちで笑い声や歓声が上がった(図6)。地元の人達も学生を交えて海外組と歓談したり、若い人達が始めたゲームの輪に加わって、交流会は最高潮に達した。「わしら今まで、外人と喋ったり呑んだり、そんなこと思うてもみなんだけど、今日はよかった、ほんまに楽しかったわ。わしらも今日からはちょっとした国際人やで・・・」と満面笑みをたたえて話してくれたのが嬉しかった。二次会は家の中で始まったが、いつ終わるとも知れず、眠くなった者から順に奥の部屋で雑魚寝した。一部の学生は近所の民家にも泊めてもらった。



図5(左) セミナーに参加してくれた四国会場近くの住民



図6(右) 地元住民も交えて、前庭での交流会を楽しむ参加者たち

24日(日)は午前7時頃から落ち葉を集めて焚き火を始め、十分に燃やした後、上に籾殻をかぶせて火床を作り、前日に収穫した芋を焼いた。別の人は朝食用の出汁を作ったり、ネギを刻み、9時過ぎに近くの製麺所に行った。どんぶりや箸など全て持参で、二十数人がぞろぞろと行進する光景は、傍目にはちょっと異様に映ったかもしれない(図7)。製麺所のすぐ外で立ったまま、できたての、腰の強いうどんをたらふく食べた(図8)。家に戻って昨日の続きが始まり、クワン氏(ベトナム・ホーチミン大学教授)が「私が見た日本」というテーマでミニ講演を行い、これまた活発な討論が行われた。

昼食は近くの小料理屋で食べた。値段のわりには刺身あり、天ぷらあり、茶碗蒸ありの立派な和風弁当で、海外組も料理の美しさにカメラのシャッターを何度も押していた。昼食後、荘内半島のドライブに出かけたが、厚い雲間から雨がポツポツ、そして次第に雨足が強くなってきた。紫雲出山の展望台からはモヤにかすんだ瀬戸の小島しか見えなかった。「お天気ならきれいでしょうにね。でも、ここは次のお楽しみ。」また来るつもりのようなのである。午後3時過ぎ、一行は高松自動車道と明石海峡大橋経由で帰路についた。



図7(左) どんぶりや箸を持参して近くの製麺所に出発する参加者たち



図8(右) 道久製麺所で、できたてのうどんを食べる参加者達

今回の目的は、これからのインドシナ諸国を背負って立つ若い人達に、日本の本当の姿、陽だけでなく陰の部分も直に

見てもらうとともに、ミーティングを通してそれぞれの国の現状や文化、歴史を互いに知ることであった。来日したのはタイとベトナムからの4名であったが、のべ百数十名の若い日本人が外国との接点を持つことができた。この会に参加した地元の人たちも、タイやベトナムがグッと近くに感じられるようになったに違いない。また、交流を深めるために「一緒に食べて、飲んで、遊ぶ」時間も十分に確保し、大学や国を越えて交流の輪が広がった。最後に、今回のセミナーでお世話になった三菱UFJ国際財団や協力して下さった神戸学院大学、一行を温かく迎えて下さった詫間町の皆様、本セミナーに寄附をお寄せ頂いた方々に心より感謝します。

ベトナム スタディツアーを終えて

アイユーゴー理事 北谷成人

8月26日～30日の4泊5日の日程で、スタディツアーとしてベトナム社会主義共和国ランドン県カッチェン郡(Cat Tien)に行き参りました。当初、10名以上の参加者を見込んでいたのですが、直前に参加希望者にいろいろなお事情ができ、結果的に関西地区から5名、中部地区から2名、合計7名の参加者となり、チケット等の手配を担当してもらいました小山理事には随分ご迷惑をおかけしました。



今回のツアーの当初の目的は、2009年国際ボランティア貯金による寄付金でCat Tienに建設した農業支援センターならびにグリーンハウスの周りに、外部から小動物の侵入を防ぐためのフェンスを設置する作業に参加することでした。しかし事業の開始の遅れなどから結果的には作業することが出来ませんでした。

Cat Tien は、ベトナム第2の都市ホーチミンから北へ自動車で4時間程と聞いていましたが、実際は思ったより時間がかかり、真夜中に到着するという強行軍でした。

農業支援センターは、来年にはフェンスが建設され、一層機能的な働きが期待できそうです。

次回行く時には、文字通り、地域の人々を支援する中心地になっていることと思います。



ツアーの目的地カチエン(Cat-tien)



(左)農業支援センター



(右)グリーンハウス

第2日午後には、少数民族の村にホームステイしました。その少数民族は、元々山間部に集落を構えていたのですが、数年前に行政の指導で、Cat Tien の街中へ移住したそうです。10年近く前に、ダラットの近郊の少数民族を訪問した時と全くイメージが違いました。



山間部の集落から移住した少数民族の移住地

もちろん電気も水道もあり、キン族の子どもも同じ学校に通っているようでした。行政や政治についての質問はしにくい雰囲気でしたので、よく分かりませんが、いつの頃からか分離政策から同化政策に転換したのだろうかと感じました。

そして今回のもう一つの目的は、文化交流でした。村の人々との交流、特に食文化交流では、出してもらったものを食べるだけでなく、我々も日本の食事を出し、夕食会をしました。買出しも近くの市場でしました。言葉は通じなくても、お互いのことを知りたいと思うと、分かり合えるものだと感じる事ができたツアーでした。



農業支援センターにて

現地の許可や村との交渉など複雑な問題は、ダラット大学のタイ教授がすべて処理してくださり、スムーズにツアーを終えることができました。また、ツアー中ずっと同行くださったクワンさん、ミンさんには、通訳だけでなく、現地の文化をいろいろ教えていただきました。ここで改めて御礼を申し上げます。何かと計画不足が目立ったスタディツアーでしたが、常に前向きにとらえて協力していただいた参加者の皆さんにも御礼を申し上げます。

ベトナム スタディツアーに参加して

昆布孝子

「何が出来るかなあ」、そんな不安な気持ちを持ちながらスタディツアーに参加しました。車窓から眺めたホーチミン市内や市民、郊外の外国企業の工場群、農業をする人々、そして訪ねた村や村民。風景を車窓から眺め、美食に酔うだけなら、旅行業者が募るベトナム観光旅行です。



今回のスタディツアーでは、快適とは言えないトイレ、風呂、炊事場の家にホームステイをして、集まった村の女性陣とは真夜中まで飲み又語り合いました。共通言語は無く、手、顔、体と言う素晴らしい言語で互いの心が通じ、彼女らの喜び、愚痴話で盛り上がり、人(女性)はみな同じだと体感しました。食文化交流では村の長老をはじめ、村中の若者や子供までもが集まり、村祭りを再現したように、音楽、踊りを交え、地元の酒、肴で大変な御馳走をふるまってくれ、私たちを心からもてなしてくれました。様々な場面で、不人情になった日本人が忘れた村意識の良さを思い起こさせてくれました。支援する側、支援される側ではなく、寝食を共にしてこそ、お互いが大きな、また重要な存在となるということを知る良い体験でした。



(左) 食文化交流会の準備



(右) 村人との食文化交流

その後、色々な集いで、このツアーの事を話す機会を持ちました。ツアーの話がきっかけで、昨年カンボジアの支援に行った事を語ってくれる若者、別の国への井戸掘りを行った等の体験を語り始めた若者がいました。それぞれの体験を通して、彼らは素直に自分たちが感じた各国の状況、例えば少数民族への対応やインフラの問題、経済格差等々熱心に語り、聞く側も目を輝かせ、新鮮な感覚で受け止めている様子に共感するものがありました。

今回のスタディツアーでは、2つの事を学べたと思います。1つは、書籍等だけでなく、ホームステイや幼稚園訪問など、自分が肌で現地を体験することが出来、そんな学びを通して、彼らと協働出来ることもあると感じたことです。2つ目は、短期の微小な体験でもそれを人に語ることで、この活動の理解者や次のツアー参加者へ何かが繋げることが出来る。そんな役割を担えるのではないかと感じる気がしました。

最後に、この機会を与えてくださった北谷先生、共にツアーに参加した方々、通訳等お世話いただいたダラット大学の関係者、村の皆様に感謝申し上げます。



少数民族の移住地に隣接する幼稚園の訪問

(2007年「ひろしま・祈りの石国際教育交流財団」の協力により建設)

アイユーゴー法人化に向けて 経過報告

～アイユーゴー代表 新田 幸夫～

アイユーゴーは2011年春に「特定非営利活動法人 アイユーゴー」になる予定です。設立後10年目にして法人格を取得し、さらに責任が増すこととなります。グローバル化がますます進む中で、地域や国間の貧富の格差や環境の破壊などが生じ、途上国の多くの人々が厳しい生活を強いられているという現実があります。私たちは、途上国での活動は今まで豊かな恩恵を受けてきた先進国の責務であると考えています。また、現地の安定が私たち自身に平和をもたらすものと確信し、タイ、ラオス、ベトナム、マダガスカルの様々な地域で持続的な支援をしています。



麻薬文化撲滅と貧困からの脱却を図る自立支援を中心に、貧しい教育環境の整備、自然保護と再生につながる活動を行っています。さらに、医療保健と福祉の分野において、事業地はもちろん日本においても人材を育成しようとしています。

こうした活動を相互の信頼関係の中で、さらにきめ細やかに推進するためには法人格の取得が不可欠となりました。昨年12月に設立認証申請を熊取町長に提出し、その後、公告され、2ヶ月間の縦覧に供されています。2月中旬に法人として確認された後に、法務局において設立の登記を行うこととなります。この日が法人の成立日となります。

みなさまのご理解とご協力をいただきつつ、さらに国際協力を推進していく所存であります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(なお、「大阪版地方分権推進制度」の活用により、2010年9月1日から熊取町に事務所を設置する法人は熊取町において設立承認等の手続きを行えるようになりました。)

【感謝】

アイユーゴー通信をご覧いただきまして、誠にありがとうございます。アイユーゴーは、自らの知識・技術・経験と奉仕の精神を持って、協力を必要とする人たちの自立を目指した開発援助を通じて、その地の文化を尊重理解し、草の根の友好親善と、自らの人間としての価値を高めることを目的とし活動します。貧しい人たち、困った人たちがいれば、その人たちのそばに行ってみませんか。そして、何かできることがあれば、自分でしてみませんか。

皆様のご参加・ご協力を心からお待ちしております。